

「雇われ羊飼いと良い羊飼いい」

(ヨハネによる福音書10:11-16)

今日は、いずれも同じ著者によるものとされているヨハネの手紙とヨハネによる福音書が読まれました。これらの書物が記された当時、クリスチャンは大変厳しい状況に追い込まれていました。なによりもまず、ユダヤ教の会堂から追放されました。これはあらゆる権利、市民としての権利をすべて失うということです。わたしたちであれば、一切の社会保障も受けられない、警察にも相手にされない、選挙権もない、ということです。クリスチャンたちはその苦しみのなかで信仰的な挑戦を受けていました。そして次に、反キリストと言われる人々の存在が教会を分裂させていました。彼らはもともとは仲間であったけれども、教会から去っていったグループで、主イエスの受肉を否定し、御父と御子とを認めないいわば新しいキリスト教を作り出してしまった人々でした。今日の使徒書、ヨハネの手紙はその反キリストからの動揺を沈めるために記されたものです。この手紙は信仰的に迷い、動揺する信徒たちに、あなたがたの内には御子から注がれた油があり、この油が万事について教える。だから、教えられた通り「御子の内にとどまりなさい」と繰り返し語ります。当時のクリスチャンたちはこのように、襲いかかる内外からの力に大きく揺さぶれ、分裂の危機にさらされてきました。

今日の福音書もこれらの背景を念頭に置くと少し理解が深まります。雇われた羊飼

いは、クリスチャンたちを分裂させようとするとする偽りの指導者たちだと解釈できます。彼らは狼が来ると、自分の命が大切なので、羊を置き去りにして逃げ出してしまいます。しかし、良い羊飼いである主イエスは羊のために自分の命を捨ててくださいなのです。事実イスラエルでは、雇われ羊飼いが羊を乱雑に扱ってしまう、というできごとがあったようです。それに対し、良い羊飼いは命がけで羊を守りました。良い羊飼いは羊の命に無関心でいられないからです。それゆえ、良い羊飼いは、羊との関係に必ずとどまります。羊が迷い出ることがないように、たとえ迷い出てしまってもどこまでも探します。そして、夜の間も羊を守り続けるのです。まさに主イエスこそがわたしたちの良き羊飼いなのだと、ヨハネによる福音書は信仰的な危機にあったクリスチャンたちに語りかけ、励ましているのです。

良い羊飼いである主イエスは、「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」と言われます。ここで言われている「知っている」「知る」ということが、今週の福音のキーワードです。雇い人にすぎない羊飼いと良い羊飼いとの違いは「知り方」の違いにあります。ここで「知っている」と訳されている単語は、ただ知識として「知っている」というだけではなく、両者の深い交わりを表す単語です。主イエスは、わたしたち一人ひとりを知っておられる。それも「父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じ」ほどに、主イエスはわたしたちのことを深く知って下さっている、ということなのです。

反キリスト者たちは主イエスの受肉を否定しました。しかし、主イエスは肉体をとられました。なぜなら、「わたしとあなた」ほどの距離までわたしたちの近くに来て、わたしたちと交わり、わたしたちを「知る」ためです。そこには、心底愛している相手を知りたい、大切にしたい、という主イエスの思いがあります。受肉した主イエスと人間との交わりとは、肉体も精神も含まれる全人格的な交わりです。主イエスは、その交わりのなかで、ご自分の命を捨ててくださるほど、わたしたちを愛してくださいます。人と人との関係を想像してみてください。知識だけ相手を知ることなどできません。そうではなく、相手を知るためには自分のあらゆる感覚、感情を持ち出さなければなりません。ですから、主イエスがわたしたちを知ってくださるということは、主イエスはすでにわたしたち一人ひとりとの全人格的な交わりに身を置いてくださっていることに他ならないのです。わたしたちにはすでにその交わりにおいて、主イエスの愛が、その主イエスの愛を通して、神の愛が注がれているのです。これは、主イエスがわたしたちと同じ肉体をとり、「わたしとあなた」の距離感へと来てくださったからこそ実現することです。そして、主イエスは今なお、聖霊を通して、わたしとあなたの距離で、わたしたち一人ひとりのことを知ってくださっています。その事実をわたしたちに教えるために主イエスは肉体をとられました。そして、このことのゆえに、主イエスこそがわたしたちのまことの良い羊飼いなのです。主イエスこそが、自分の危険を犯してまで、自分の命をかけてまでわたしたちをまこ

との愛へと導いてくださるからです。主イエスは今も、わたしたち一人ひとりとの交わりとしておられる。だから、わたしたちはその招きに応え、主イエスとの全人格的な交わり、互いに「知る」関係に身をおくなら、わたしたちは主イエスと神との愛の交わりに迎えられるのです。この主イエスとの交わりに身を置くことこそ、ヨハネの手紙が繰り返し言っている「主イエスにとどまる」ということです。この交わりに身を置くと、わたしたちはご自分の命をも捨てるほどにわたしたち一人ひとりと深く交わってくださっている主イエスの愛を知ることができるのです。

良い羊飼いである主は、わたしたちがどんなに離れていようとも、わたしたち一人ひとりのことを知っていてくださいます。そして、今なお、わたしたち一人ひとりと交わり、関わることを求めておられます。「この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならい」と仰る主イエスは、必ずわたしたちを見つけ、わたしたち一人ひとりをご自身との交わりへと招いてくださいます。何度わたしたちが主イエスを見失ったとしても、「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」と言われるように、わたしたちにいつまでも関わり続け、神との深い交わりにある一つの群れへと導いてくださいます。

今日もこの礼拝で、わたしたちの真の羊飼いの声を聴きましょう。そして、主イエスとの交わりに与り、神の愛に生かされるものとされましょう。